

今週の為替相場見通し(2017年10月2日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.47 ~ 113.26	112.50	110.80 ~ 114.80
ユーロ	(ドル)		1.1717 ~ 1.1937	1.1813	1.1600 ~ 1.1950
(1ユーロ=)	(円)		131.75 ~ 134.30	132.91	131.00 ~ 134.50
英ポンド	(ドル)		1.3344 ~ 1.3570	1.3400	1.3250 ~ 1.3450
(1英ポンド=)	(円)	*	149.76 ~ 152.27	150.75	148.50 ~ 151.50
豪ドル	(ドル)		0.7799 ~ 0.7974	0.7832	0.7650 ~ 0.7950
(1豪ドル=)	(円)	*	88.02 ~ 89.68	88.13	86.50 ~ 89.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 和地 淳史

(1)今週の予想レンジ: 110.80 ~ 114.80 円

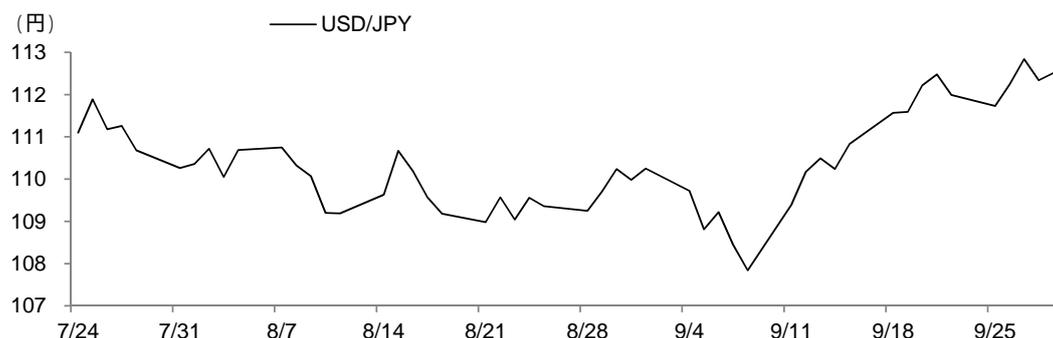
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は112円台を中心としたもみ合いとなった。週初25日に112円台前半でオープンしたドル/円は、輸入勢の買いや底堅い株価にサポートされて112円台半ばまで上昇する場面が見られた。しかし、北朝鮮の李外相が「(週末のトランプ米大統領の発言は)明確な宣戦布告」と述べたことで、リスク回避姿勢が強まると週安値となる111.47円まで急落。米金利が下げ止まると111円台後半まで反発したが、26日に株価が軟調な動きを見せると再び111円台半ばまで弱含んだ。その後は米金利上昇によるドル買戻しの動きが見られたため、ドル/円は112円を回復。さらに、イエレンFRB議長が「インフレ率が目標の2%に戻るまで金融政策を据え置くのは賢明でない」と指摘したことから、米金利上昇・ドル買いの動きが強まり112円台半ばまで続伸した。27日は米税制改革案への期待感を背景にドル/円は2か月半ぶりに113円を突破し一時週高値となる113.26円まで上げ幅を拡大。しかし、発表された税制改革案はほぼ予想通りの内容で、利食い売りに112円台半ばまで反落した。28日は米金利が上昇すると113円台を回復したものの、すぐにドル売りに反落。29日の期末日は、本邦輸出勢の動きは限定的となる一方、輸入勢の買いは相応に見られたことで、ドル/円は底堅い動き。米8月PCEコアが予想を下回ると一時的に112円台前半までドル売りが強まる場面が見られたが、次期FRB議長の指名を巡りトランプ大統領が規制緩和に前向きとされるケビン・ウォーシュ氏と面会したとの報を受けて、米株の堅調推移を受け下げ幅を縮小。112.50円で越週となった。

今週のドル/円相場は、底堅い展開を予想。期末に強まりやすい本邦輸出勢の売りをこなして、ドル/円は下値を切り上げている状況。既に米税制改革案の議会審議が難航することが織り込まれている中では、不穏な動きを続ける北朝鮮関連以外で突発的なネガティブサプライズは起きにくいと、基本的にはドル買いの動きがみられやすいか。日本では今月の衆議院解散総選挙が注目されるも、現状では自民党が苦戦するシナリオはリスクシナリオであり、まだ円買いの材料とはなりにくい。テクニカル面では、ドルインデックスは4月より続いてきた下降トレンドをブレイクし始めた状況であるため、期が変わって明確に一目雲に突入できれば、ドル買いの雰囲気は継続しやすいだろう。今週は、米雇用統計週となるものの、仮に予想を下振れたとしてもハリケーンの影響によるものとして反応が限定的となる可能性は高く、むしろ良好な結果となった場合には円売りが進みやすいと考える。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/25~9/29)の値動き: 安値 111.47 円 高値 113.26 円 終値 112.50 円



2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1950 131.00 ~ 134.50 円

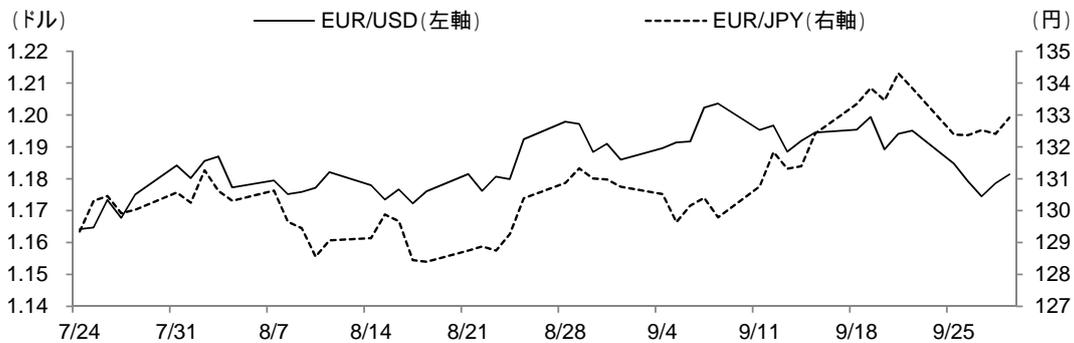
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にややレベルを戻すも総じて軟調な展開。週末24日に実施されたドイツ連邦議会選挙はメルケル首相率いる与党キリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)が第1党を維持。注目された極右政党のドイツのための選択肢(AfD)は得票率を伸ばして議席を獲得。週初25日のユーロ/ドルは小幅ながらギャップダウンして1.19台前半でオープン。一時週高値となる1.1937まで値を戻すも、与党CDU・CSUが議席数を大きく減らす展開となったことに加えて、社会民主党(SPD)が現在のCDU・CSUとの大連立解消を決定すると先行き不透明感が強まり、ユーロ/ドルは1.18台後半まで下落した。26日は、北朝鮮外相による発言を背景に一部で警戒された北朝鮮リスクが緩む中で米金利上昇が上昇するとドル買い優勢地合いとなりユーロ/ドルは軟調推移。さらにイエレンFRB議長による講演の中でタカ派寄り発言が材料視されると1.17台後半まで続落。27日のユーロ/ドルは、軟調地合いが継続する中で一時週安値となる1.1717をつける場面が見られたが、公表された米税制改革案が特段目新しい材料なく概ね事前の報道通りの内容となるとドル売り優勢の展開となり、1.17台後半まで反発。その後は1.17台前半まで弱含んだが、28日にECB理事であるハンソン・エストニア中央銀行総裁がユーロの現水準は適切であるとの発言をしたほか、ユーロ圏9月景況感指数が2007年7月以来の高水準を記録したことなどを背景にユーロ/ドルは1.17台後半まで値を回復する展開。29日、期末特有のフローが散見される中でユーロ/ドルは1.18台まで上値を伸ばす。その後発表された米経済指標が軟調な内容となったこともあり、1.18台前半での底堅い展開が続き、結局対ドルでは1.18台前半、対円では132円台後半で越週となった。

今週のユーロ相場は、レンジを一時的に切り下げる展開は想像していないが基本的には上値の重い推移を予想する。9月24日に実施されたドイツ連邦議会選挙は与党CDU・CSUが第1党を維持しメルケル氏4度目の首相の座が確実となり、事前予想通りの結果となった。しかしながら同党が大きく議席数を減らしたことに加えて同じく大きく議席数を減らす結果となった第2党であるSPDが同党との第連立解消を決定、更に数十年ぶりに極右政党(AfD)が議席を獲得するに展開となり、不安材料を残す結果となった。各党ともAfDとの連立は拒否することが見込まれ、メルケル氏の政権運営を揺るがす程の大きな影響はないと考えられるが、同結果を背景として足許で続いている上値の重いユーロ相場はもうしばらく続きそうだ。今週は米国にて主要経済指標の発表を多数予定しているが、8月から9月にかけて襲来したハリケーンの影響を考慮する格好にいずれもハードルは低そうだ。足許で再度高まりをみせつつある米12月利上げ期待を背景とした堅調なドル相場が今週も続く予想される中、ユーロ相場の重石となりそうだ。かかる状況下、ユーロが積極的に買われる材料にも乏しく上値の重い展開を基本線とするが、先月のECB理事会にてこれまで「秋頃」とされていた来年以降の緩和政策決定を「10月」にすると時期を明確化したように金融政策正常化路線を着実に歩む中ではユーロが一方的に売られる展開も考え難い。今週のユーロ相場は一定のレンジ内での上値の重い展開を予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/25~9/29)の値動き: (対ドル) 安値 1.1717 高値 1.1937 終値 1.1813
(対円) 安値 131.75 高値 134.30 終値 132.91



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3250 ~ 1.3450 148.50 ~ 151.50 円

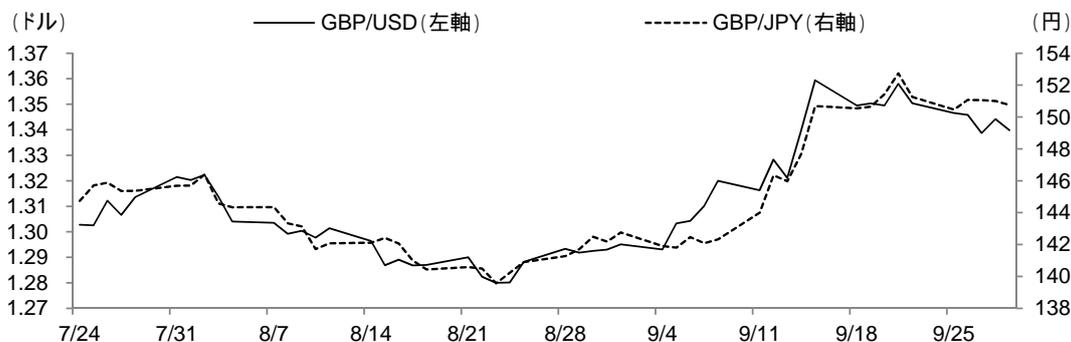
(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、対ドルでじり安、対円で下押し先行後横這い、対ユーロではじり高先行後反落と主要通貨に対してもそれぞれの値動きを見せた。29日に見た下落・反発を除けば、ポンドの値動きの概ねは他通貨側の要因によるものと思われた。25日のポンド/円急落は、トランプ米大統領の国連演説の「北朝鮮を完全に破壊する以外選択肢はなくなる(19日)」との発言に対し、北朝鮮外相が「宣戦布告にあたる」と述べたことが材料視され、「リスク回避」に促された円高の結果と考えられた。週を通して続いた対ドルでの軟調推移は、20日に発表された米連銀公開市場委員会委員の政策金利見通しが市場の予想以上に利上げに積極的な姿勢を示していたことに続き、26日にも、イエレン米連銀議長が「(金融引き締めが)ゆっくりし過ぎないように注意すべき」など発言したことが材料視された。一方で、対ドルだけでなく、対円、対ポンドなどでもユーロの軟調が先行した一因に、24日投開票された独総選挙の結果、極右勢力が台頭したり、連立交渉の難航が予想されたりしたことが嫌気された可能性が考えられた。29日に観察されたポンド全面安は、同日発表された英4~6月期GDP確定値が、速報値・改定値の前年比+1.7%から同+1.5%に下方修正されたこと(前期比の数字は+0.3%で修正されなかった)に加え、同時に発表された英4~6月期経常収支(後述)が▲232億ポンドと市場予想(▲159億ポンド)を大幅に下回った(赤字が大きかった)ことが嫌気された値動きと考えられた。その後、英中銀カーニー総裁は「(英経済指標が示しているように)経済が足元の軌道上を進むのなら、比較的近い将来の利上げを予想できる」などと述べ、あらためて近い将来の利上げの可能性を示唆したが、ポンドの反発は小幅、かつ一時的にとどまった。

今週の英ポンド相場は、続落を予想。ポンド安を見込む要因は主にふたつ。引き続き英のEU離脱交渉に進展が見られず、合意なしの離脱(所謂「クリフエッジ」)の可能性が高まっていることと、(ポンド安のおかげで)改善基調にあると思われていた英経常収支の想定外の悪化に対する懸念の高まり。29日に発表された英経常収支は、4~6月期分の下振れだけでも相応に意外だったが、過去4四半期分(2016年4~6月期から2017年1~3月期)の下方修正は、合計309億ポンドと半端な数字ではなかった。2016年の名目GDPとの単純な比較で、突然経常赤字が1.3%ポイント分も拡大したことになる。下方修正の概ねは所得収支項目の投資収支(合計289億ポンドの下方修正)だった。この数字(配当・利払い収支などの赤字拡大)が意味するところは現時点ではっきりしないものの、少なくとも英の経常赤字ファイナンスが今後一段と困窮する可能性はポンド安要因と言えるだろう。25日再開されたEUと英の離脱交渉(4回目)も、具体的な進展を見せたとは言い難い。交渉後のデイビス英EU離脱担当相とバルニエEU首席交渉官の記者会見(28日)は、交渉前進を誇る美辞麗句に満ちていたが、具体的な交渉進展は引き続きほとんど示されることはなかった。EU側が実質的な交渉期限とする来年10月に向け、刻々と時間は過ぎていくが、英の求める離脱後の通商関係などを定める将来協定、離脱から将来協定までへの移行期間のあり方を定める移行措置協定の交渉が開始される目途は現時点で全く立っていないと言える。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/25~9/29)の値動き: (対ドル) 安値 1.3344 高値 1.3570 終値 1.3400
(対円) 安値 149.76 高値 152.27 終値 150.75



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7650 ~ 0.7950 86.50 ~ 89.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、対ドル・対円ともに下落する展開。週初25日は対ドルで0.79台半ば、対円で89円台前半レベルでオープン後、海外時間に北朝鮮の李外相が「(週末のトランプ米大統領の発言は)明確な宣戦布告」と述べベリスクオフの動きとなったことから、クロス円が売られる展開に対ドルでは0.7930レベル、対円では88円台前半まで下落。翌26日、米金利上昇やイエレンFRB議長のタカ派な発言を受けドル買いが強まったことから、豪ドルは対ドルで0.78台半ばまで続落。さらに27日は米税制改革案への期待感からドル買いの動きが続いたことや、米8月耐久財受注の良好な結果を受け、0.7840割れまで下落。発表された税制改革法案はほぼ予想通りの内容で、市場の失望を招くとドル売りの展開となり一時0.78台後半まで調整する場面も見られたが、米株に堅調に推移し米金利が上昇する展開に再度0.78台半ばまで値を戻す展開となった。28日はドル買いの動きが続いたことに加え、アジア時間に鉄鉱石価格が大幅下落する展開に、豪ドルは対ドルで週間安値となる0.7799をつけた。その後は、ポジション調整の動きに0.7860レベルまで値を戻す場面も見られたが上値は重く、対ドル、対円それぞれ0.783台前半、88円台前半で越週した。

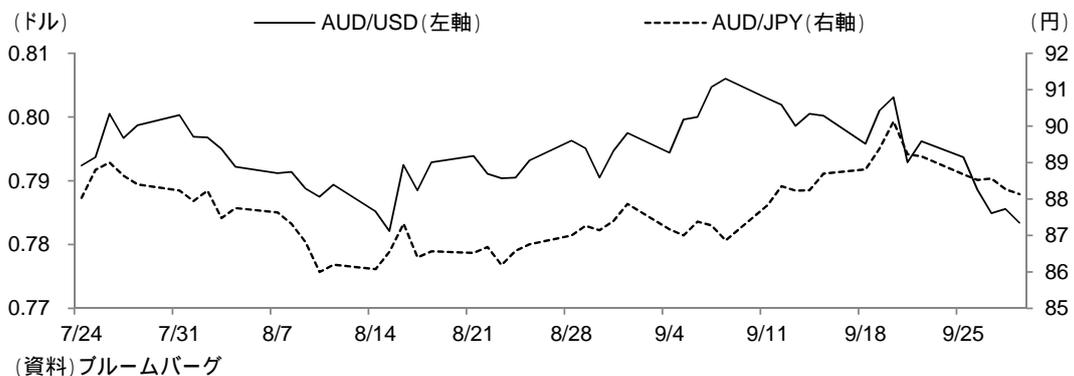
今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想。先週は、豪ドル個別の材料に乏しかったものの、一般的なドル買い戻し地合いとなったことや、資源価格の軟調推移を背景に豪ドルはじり安の展開となった。需給環境に鑑みれば、先週の安値レベルである0.78ちょうど付近では、豪州の輸出企業を中心に旺盛な押し目買い意欲が確認されており、またテクニカル分析の点からみても一目均衡表の雲下限でサポートされた格好となっている。然しながら、鉄鉱石をはじめとするベースメタルが軟調推移を続けており、足元のドル買い地合いも相まって反発の兆しが見えないこと。米金利が高値圏で推移する中で、ドル買い戻しの流れが続く状況下、豪ドルのロングポジションが依然として溜まっていることを勘案すると、豪ドルの上値が重い展開は続きやすいか。直近の豪州準備銀行(RBA)のロウ総裁の発言からも見て取れるように、RBAからは差し迫った利上げ意欲は感じられない状況。今週は、3日(火)にRBAの金融政策決定会合が予定されているが、中国で18日から開催される5年に1度の共産党大会に対する不透明感も燦る中で、タカ派スタンスとなるとは考えづらく、豪ドルサポート材料とはなりづらいだろう。その他、3日(火)に豪8月住宅建設許可件数、5日(木)に豪8月貿易収支、8月小売売上高が発表される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/25~9/29)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7799 高値 0.7974 終値 0.7832

(対円) 安値 88.02 高値 89.68 終値 88.13



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。